スポーツ人類學研究
第19号：29 - 34．2017

研究資料

土佐英信流系居合に見る新陰流の影響
―無双直伝英信流・夢想神伝流と新陰流の術技的関連性―

小椋　一広＊

1．はじめに

現代武道である居合道は，流派という概念がほとんど失われた剣道と異なり，現在においても，修行者はいずれかの流派に属したうえで稽古を行うのが通例となっている。この居合道界における最大流派として，多くの居合道家が属し修行している流派が，無双直伝英信流と夢想神伝流の2流である。

この無双直伝英信流と夢想神伝流は，もともとは土佐で伝承されていた同一の流派「無双直伝英信流」である。現在の無双直伝英信流は，幕末期に「谷村派」と称された無双直伝英信流の系譜であり，一方の夢想神伝流は，同じく幕末期に「下村派」と称された流れとされている[1]。幕末期までは同一の流派であったがゆえに，両流で伝承される術技体系にも，ほとんど相違はない。こうした伝承上における歴史的背景を踏まえ，本稿では，両流をひとつの居合流派「土佐英信流系居合」として扱っている。

土佐英信流系居合は，納刀した状態から抜刀しつつ応じるという術技「居合」を表芸とする。その居合は，居合中興の祖と仰がれる林崎甚助重信（1542? － 1621）の流れとされる。一方で，土佐英信流居合は，居合を表芸とする流派ではあるものの，「無双直伝（英信）流」を土佐に伝えた林六太夫守政（1662 － 1732）の剣術の師が新陰流だったことにより，剣術流派である新陰流の影響を受けているとされる。

この土佐英信流系居合に関しては，先行研究はほとんど存在していない。土佐英信流系居合と新陰流の関連性については，皆無である。無双直伝英信流に関するものとしては，榎本鐘司「北信濃における無雙直傳流の伝承について」（1994）があるものの，この先行研究は，土佐に伝わった土佐英信流系居合と源流は同じである，信州で伝承された和術[2]を主とする無双直伝（英信）流に関するもので，いわば土佐英信流系居合にとっては分流のようなものであり，新陰流との関連性があるとされる土佐英信流系居合についての考察ではない。

以上を踏まえ，本稿では，信州伝承の無双直伝（英信）流では存在しない，土佐英信流系居合で独自に編まれた教伝である「大森流」と「太刀打之位」，そして土佐英信流系居合の大事とされる「雷電」を対象として，土佐英信流系居合における新陰流の影響を明らかにすることを課題とする。

＊京古武術研究会

2. 大森流と新陰流

2-1　大森流概略

土佐英信流系居合における「大森流」は，「正座之部」や「初伝」とも呼称される，新陰流[3]の大森六左衛門正光（生没年不詳）が寛永年間（1624～1645）頃に編み，大森正光の弟子で，土佐山内家家臣であったとされる林守政が土佐英信流系居合に組み入れた，居合の形である。表1のとおり全部で11本あり，10本目を除き，正座から遣う居合形となっている。

表1　大森流の名義比較

無双直伝英信流での名義	夢想神伝流での名義
前（まえ）	初発刀（しょはつとう）
右（みぎ）	左刀（さとう）
左（ひだり）	右刀（うとう）
後（うしろ）	当刀（あたり）
八重垣（やえがき）	陰陽進退（いんようしんたい）
受流（うけながし）	流刀（りゅうとう）
介錯（かいしゃく）	順刀（じゅんとう）
附込（つけこみ）	逆刀（ぎゃくとう）
月影（つきかげ）	勢中刀（せいちゅうとう）
追風（おいかぜ）	虎乱刀（こらんとう）
抜打（ぬきうち）	抜刀（ばっとう）

形の名義が無双直伝英信流と夢想神伝流で異なるのは，無双直伝英信流の大江正路（1852－1927）がそれまでの名義から改称したためとされている。よって，大森流本来の名義を伝承しているのは，夢想神伝流ということになる。

大森流には，土佐英信流系居合における「長谷川英信流[4]」と重複する遣い方（形における運剣，動作）が多く見られる。これは，大森流を編んだ大森正光は，新陰流だけでなく，無双直伝（英信）流も林守政の師である荒井勢哲清信[5]（生没年不詳）に学んでいたとされており，大森正光は，無双直伝（英信）流において立膝（居合膝）にて行われていた，次の名義である居合形から構成されている長谷川英信流を基にして[6]，新たに正座から遣う居合形を編んだためと考えられる。

長谷川英信流（中伝，立膝之部）10本の居合形名義

横雲（よこぐも）／虎一足（とらいっそく）／稲妻（いなづま）／浮雲（うきぐも）／山嵐（やまおろし）（嵐（おろし））／岩浪（いわなみ）／鱗返（うろこがえし）／浪返（なみがえし）／滝落（たきおとし）／抜打（ぬきうち）（真向（まっこう））[7]

長谷川英信流の居合形は，表2のとおり，10本のうち6本が大森流においても見られる遣い方となっており，林守政が，大森流は無双直伝（英信）流とほとんど相違がない[8]ので土佐英信流系居合に組み入れたとする伝承と符合する。

表2　大森流と長谷川英信流の対応表

大森流	長谷川英信流	遣い方
初発刀	横雲	前敵に抜き付け，斬り下ろし
左刀	鱗返	左敵に抜き付け，斬り下ろし
右刀	－	右敵に抜き付け，斬り下ろし
当刀	浪返	後敵に抜き付け，斬り下ろし
陰陽進退	横雲，虎一足	前後の進退による応じ
流刀	－	左敵からの打ちを受け，流す
順刀	－	介錯
逆刀	－	前敵への連ね打ち
勢中刀	稲妻	右敵からの打ちに抜き付け
虎乱刀	横雲	前敵に抜き付け，斬り下ろし
抜刀	抜打（真向）	前敵に真っ向抜き打ち

2-2　大森流における新陰流の影響

大森流は新陰流の大森正光によって編まれ，その遣い方も新陰流から工夫されたとするのが，土佐英信流系居合における伝承[9]である。新陰流には多くの派があるものの，大森正光の新陰流が将軍家御流儀と称されることがあること，大森正光は荒井清信から江戸で居合を学んだと考えられる[10]こと等から，ここでの新陰流は，柳生但馬守宗矩（1571－1646）を祖とする江戸柳生の新陰流と考えられる[11,12]。

剣術を表芸とする江戸柳生の新陰流には，大森流のような正座からの居合形は存在していない。そのため，居合形である大森流と新陰流について，両流の関連性を術技的な観点から見出すのは難し

い。大森流居合形の遣い方からは，新陰流の影響を直接辿ることはできないのである。

大森流と新陰流の術技的な繋がりは不明である一方で，大森流の所作である帯刀法は，わずかに新陰流の影響が垣間見ることができるものとなっている。

大森流で見られる帯刀法は，「前半（差）」と呼ばれるものである[13]。これは，「鍔」が体の中心にくるよう閂差しにする帯刀法である。この帯刀法は，17 世紀後半頃まではあまり見られない，江戸柳生の新陰流独自の帯刀法であったようで，「葉隠」[14] には，「柳生流[15] には抜出して差させ候」とあり，前半（差）が当初は一般的な差し方でなかったことが記されている。

以上のことから，大森流で見られる前半（差）が，伝承過程での変更ではなく，当流成立当初からの差し方であるのであれば，この帯刀法は，新陰流からの影響に依るものとも考えられる。

3. 太刀打之位と新陰流

3-1　太刀打之位概略

土佐英信流系居合「太刀打之位」は，大森流や長谷川英信流のように一人で行う居合形ではなく，古流剣術で見られる，師である打太刀と弟子である仕（使）太刀で行う組太刀，型（形）である。次の 10 本の業で編まれており，内 3 本が納刀状態から応じるものと，居合流派の組太刀といった趣が強い構成となっている。

太刀打之位 10 本の組太刀名義

出合（であい）／附込（つけこみ）／請流（うけながし）／請込（うけこみ）／月影（つきかげ）／水月刀（すいげつとう）／絶妙剣（ぜつみょうけん）／独妙剣（どくみょうけん）／心明剣（しんみょうけん）／打込（うちこみ）

太刀打之位が編まれた時期については，判然としていない。信州で伝承された無双直伝（英信）流には，大森流と同じく伝承されておらず，また，土佐英信流系居合の伝書である文政 2 年（1819）の「神傳流秘書」にはすでに太刀打之位の記載があることから，林守政が大森流を組み入れた時期とほぼ同時期に編まれ，土佐英信流系居合に加わったと考えられる。

土佐英信流系居合には，信州伝承の無双直伝（英信）流には見られない組太刀として，太刀打之位のほかに，次の 11 本の業から構成される「詰合之位」がある。

詰合之位 11 本の組太刀名義

八相（発早）（はっそう）／拳取（こぶしとり）／岩浪（いわなみ）／八重垣（やえがき）／鱗返（うろこがえし）／位弛（くらいゆるみ）／燕返（つばめがえし）／眼関落（がんせきおとし）（柄砕（つかくだき））／水月刀（すいげつとう）（水月（すいげつ））／霞剣（かすみけん）／討込（うちこみ）

詰合之位は，土佐英信流系居合の祖流ともいうべき「重信流[16]」の組太刀であるとされ[17]，内 6 本が，甲冑に身を固めた状態での座り方とされる「立膝（居合膝）[18]」で納刀した状態から応じ業である。この詰合之位は，表 3 のとおり，その遣い方や構成が，太刀打之位と非常に似たものとなっている。

表 3　太刀打之位と詰合之位の対応表

太刀打之位	詰合之位	遣い方
出合	八相（発早）	抜き合い，面を打つ
附込	拳取	抜き合い，拳を取る
請流	－	打ち合い，受流して面を打つ
請込	－	打ち合い，開いて小手を打つ
月影	－	拳を合わせ，抜いて面を打つ
水月刀	水月（刀）	受流して，面を打つ
絶妙剣	眼関落（柄砕）	拳を合わせ，顔に柄当て
独妙剣	鱗返	十文字に受け，摺り込む
心明剣	－	抜刀して受け，面を打つ
打込	討込	真っ向に打ち合う

以上のことから，太刀打之位は，納刀状態からの業が多い詰合之位を基にしつつ，より剣術色を強めて編まれた組太刀と考えることができる。

林守政の居合の師である荒井清信は，長谷川英信流に加え，重信流等の林崎系居合も学んでいた

とされる。この荒井清信の重信流が，荒井自身又は居合や剣術をより重視する林守政により土佐英信流系居合に組み込まれ，詰合之位と称される組太刀になったと考えられる。林守政は，ここで組み込まれた重信流である詰合之位を基として，表太刀[19]と位置付けられる太刀打之位を編まれたのであろう。

3-2　太刀打之位における新陰流の影響

詰合之位から編まれたと考えられる太刀打之位は，一方で「陰流」の組太刀である[20]ともされている。陰流は，剣術の三大源流とひとつとされる，愛洲移香斎久忠（1452 － 1538）が開いた古流であるが，ここでいう陰流は，源流である陰流そのものではなく，陰流の流れである新陰流であろう。太刀打之位は，介者剣術[21]である陰流の刀法ではなく，ここでの新陰流[22]と同じく素肌剣術[23]の遣い方になっている。流名の呼称についても，新陰流であっても陰流と称することがあり[24]，太刀打之位が土佐英信流系居合に組み込まれたのが新陰流の影響を受けた林守政とほぼ同時期であることからも，新陰流を指していると考えられるのである。

前述のとおり，太刀打之位は，同流の詰合之位が基になって編まれたことはほぼ間違いがない。そこに新陰流の影響もあったか，ということなのだが，伝承される太刀打之位の術技からは，明確にはそれを見出すことはできない。

太刀打之位の3本目「請流」は，江戸柳生の新陰流における「斬釘截鉄（ざんていせってつ）[25]」に似た運剣とはなっているものの，ここで用いられる受け流し的な太刀筋は多くの流派で遣われるものであり，また，構えや打突部位等に違いも見られるため，新陰流の斬釘截鉄が基であると断定するのは難しい。

8本目の「独妙剣」は，新陰流の「捷径（しょうけい）[26]」と同じような，片手で柄を握りもう一方で手を刀身に添えた「添え手」の状態で受け，そこから相手の打ちを摺り落とす遣い方を見せているが，添え手が両流では左右反対であるばかりでなく[27]，そもそも編まれた想定が全く異なっている。独妙剣が特定状況を設定していない，一般的な組太刀であるのに対し，捷径は，小路等のように左右が狭まった，刀を自在に操るのが難しい状況を想定している。編まれている業の想定が異なる以上，多少の外形的な類似があったとしても，両者は全くの別物と考えざるをえないだろう。

10本目の「打込」は，表面的な動きからは新陰流の「合撃（がっし）[28]」を連想させるが，その遣い方は合撃としてのものとはなっていない。そもそも合撃は，林守政の時期における江戸柳生の新陰流には存在しない，尾張柳生の新陰流において工夫された術技であり，この合撃を打込と関連付けることには無理がある。

このように，新陰流との関連性が比較的窺える業でも，そこから新陰流との繋がりを断定するのは難しく，逆に5本目の「月影」では，新陰流の代表的な組太刀である「一刀両段[29]」と同じく「車」の構えから応じるにもかかわらず，その遣い方は全くの別物となっている。新陰流の代表的な組太刀とも異なる遣い方を採っている以上，太刀打之位に新陰流の思想が影響していたと考えるのは，非常に難しいといえる。

4. 雷電と新陰流

4-1　雷電概略

土佐英信流系居合における「雷電[30]」は，現在では伝承上すでに名称として使用されていない，「外物之大事」における1本として，伝書上にのみ見ることができる業である。

次の外物之大事6本が編まれた時期は不明だが，信州で伝承された無双直伝（英信）流には存在せず，土佐英信流系居合の伝書である明和元年（1764）の「居合兵法極意秘訣[31]」には，雷電に

関する多くの記述が存在することから，大森流や太刀打之位と同じく，林守政の時期に編まれ，土佐英信流系居合に加わったと考えられる。

外物之大事 6 本の名義

行連（ゆきづれ）／連達（つれだち）／追懸切（おいかけぎり）／惣捲（そうまくり）／雷電（らいでん）／霞（かすみ）[32]（八相（はっそう））

外物之大事 6 本のうち，雷電と霞以外の 4 本は，現在も居合形「奥伝（奥居合）」の立業として伝承されている。このことから，失伝となった雷電と霞も，基本となる遣い方は，組太刀ではなく居合形であった可能性もある。

4-2　雷電における新陰流の影響

雷電は，すでに失伝してしまっているため，どのような居合形や組太刀であったかは判然としない。しかし，「居合兵法極意秘訣」には，雷電は林崎系居合の極意とされる「柄口六寸之勝[33]」であるとされ，その遣い方が複数例示されている。その例示の中に「和卜刀」とされるものがあり，この名義だけでなくその遣い方もまた，新陰流における「和卜（かぼく）」とほぼ同一の業となっている。さらに，表 4 のとおり，和卜刀以外に示されている雷電の遣い方も，新陰流の太刀[34]と非常に似たものとなっており，雷電として複数例示された遣い方からは，新陰流の影響を強く見て取ることができる。

表 4　雷電と新陰流の対応表

居合兵法極意秘訣における雷電の遣い方	対応する新陰流の太刀名義
するすると行かずして身を沈み車に構え，敵切ってかかる其拍子をうけず其間合を勝事	一刀両段
太刀をあだ切をして二之太刀にて勝位も有，是も我より気に乗りて行くべし	逆風[35]
相懸にて敵来る時先に敵の太刀を殺して勝位有，古人和卜刀とも云えり	和卜[36]

また，以上のような例示された雷電は，足を強く踏まず，体が居着かないよう，浮き浮きと立って遣うとも記されており，こうした足踏・歩法から，ここでの新陰流は，尾張柳生ではなく，江戸柳生の流れであることがわかる。尾張柳生では，「風帆之位」と称される，土踏まずで床を踏み下半身を安定させる歩法が重視されているのに対し，江戸柳生では，左足の踵を浮かせ軽やかにするとされている[37]。雷電における足踏・歩法は，尾張柳生のそれとは正反対ともいえるものである一方，江戸柳生で採られていた足踏・歩法とはほぼ一致しているのである。

雷電は，柄口六寸之勝と同じように相手の拳を打って勝つ遣い方であり，柄口六寸之勝が納刀状態からであるのに対し，例示された複数の雷電は，抜刀状態からの業となっている。この「相手の拳を打って勝つ」という勝ち口は，新陰流では「十文字勝ち（転勝ち（まろばし））」と呼ばれるものだが，土佐英信流系居合にも，林守政の時期に編まれたと考えられる「上意之大事[38]」14 本の中に，すでに失伝となってはいるが「十文字」という名義の業があり，この十文字の遣い方もまた，新陰流の十文字勝ちと同じく拳を打つというものになっている。土佐英信流系居合における十文字もまた，新陰流の影響により編まれた業であった可能性がある。

5. おわりに

土佐英信流系居合における新陰流の影響は，すでに失伝となっている外物之大事「雷電」に見ることができた。これにより，土佐英信流系居合と新陰流の関係は，従来からの伝承のとおりであったということができる。土佐英信流系居合を大成したといえる林守政の時期に，新陰流の思想や術技が土佐英信流系居合に導入されたことは確かといえよう。しかし，雷電以外のその他居合形や組太刀には，上意之大事「十文字」が新陰流との関連性をやや窺わせるものの，明らかに新陰流の影響と呼べるものは見出すことができなかった。土佐英信流系居合においては，居合形や組太刀とは別伝といった形での新陰流の伝承がなされなか

ったため，新陰流からの影響や当流との術技的関連性を直接的に明らかにすることは難しい状況にある。新たな目録や覚書といった伝書の発見が，こうした状況の打開,解明に繋がると考えられる。

【注】

[1] このような区分は幕末期ではなく，明治以降になってからともいわれる。

[2] 和（やわら），柔術のこと。

[3] 山川幸雄「神傳流秘書」や中山博道「居合の意義及由来の概要」には「真陰流」とある。また，「神影流」とされることもあるが，いずれにしても上泉伊勢守信綱（1508 － 1582?）を流祖とする新陰流の流れであるため，本稿では新陰流とする。

[4]「中伝」や「立膝之部」とも称される。

[5] 17 世紀前半頃に生まれ，17 世紀後半から 18 世紀前半にかけて指南していたと考えられる。

[6] 無双直伝（英信）流には，「居合」と称された長谷川英信流以外にも，「九ノ腰」と称される居合形があり，これは，土佐英信流系居合における奥伝（奥居合）居業の原形と考えられる。

[7]「抜打（真向）」のみ正座から遣われる居合形であるため，大森流を土佐英信流系居合に組み入れた際に，初伝，中伝といった各段階を真っ向斬り下ろしで結ぶために追加した形とも考えられる。

[8]「神傳流秘書」には「英信と格段意味無相違」とある。

[9] 無双直伝英信流の河野百錬は，真影流古流五本の形から創案としている。

[10] 大森正光の居合の師とされる荒井清信は江戸で居合剣術を教授していたとされることから，大森正光も江戸で学んでいたと考えられる。

[11] 高知市立自由民権記念館蔵「細川家資料」の「大森流居合術名覚」には,伝系に柳生宗矩や柳生十兵衛三厳（1607 － 1650）の名も記されている。

[12] 江戸柳生の新陰流以外には，同じく上泉信綱の新陰流に連なる真陰流系も考えられる。

[13] 派によっては,柄頭を体の中心とした閂差しとしている。

[14] 山本常朝・田代陣基「葉隠　聞書第一」

[15] 江戸柳生の新陰流は，「柳生新陰流」や「柳生流」とも呼称された。

[16] 居合・抜刀術の祖とされる林崎甚助重信（1542 － 1621）による流派。「林崎夢想流」や「神夢想林崎流」とも呼称された。

[17]「神傳流秘書」には「重信流也」とある。

[18] 片方の膝を立てる座法。

[19] 初心や初級の者が学ぶ基本の業。

[20] 谷村派と下村派両派で，陰流とする伝承がある。

[21] 甲冑に身を固めた状態で遣う剣術。

[22] 柳生三厳「月之抄」や佐野嘉内「柳生流新秘抄」からは，江戸柳生の新陰流が素肌剣術へ移行していたことが読み取れる。

[23] 平服にて遣う剣術。

[24] 柳生厳春は新陰流について「陰流書」として記している。

[25]「斬釘截鉄」には何様かあるものの，ここでは，打ち払いを受け流す遣い方を指す。

[26] 左片手で受けて摺り落とし，突き込む。

[27] 柄を握る手（刀身に添える手）が左右逆になることは，伝承過程で見られないことではない。

[28] 相手よりやや遅れて振り出すことにより上（乗）太刀となって勝つ打ち方。

[29] 車の構えから，足を踏み替えることなくそのまま相手の拳を打つ。

[30] 現在も伝承される大江正路が明治時代に編んだ「番外之部　雷電」とは別業。

[31] 林政翃著，山川幸雄写

[32] 無双直伝英信流で現在も伝承される「奥居合　霞」とは別業。

[33] 柄を握る拳に抜き付ける，抜き打つ抜刀法。

[34] 新陰流における組太刀の呼称。

[35] 袈裟に誘うように打ち，それに乗って打ってきた相手の拳を打つ。

[36] 打ちに対し，右に開いて拳を打つ。

[37]「月之抄」

[38]「上意之大事」は 14 本から構成され,その多くは奥伝（奥居合）の居業・立業として現在も伝承されている。

【文献一覧】

今村嘉雄（1967）「史料柳生新陰流　下巻」 東京　人物往来社　pp.9-78

榎本鐘司（1994）「北信濃における無雙直傳流の伝承について」スポーツ史研究第 7 号 pp.21-36

木村栄寿（1982）「林崎抜刀術兵法　夢想神傳重信流　傳書集及び業手付解説」 木村茂喜　pp.45-141

京一輔（2006）「居合道精義」 東京　愛隆堂　pp.8-13

国書刊行会（1915）「武術叢書」 東京　国書刊行会　pp.298-312